特集

多みんぞくニホン

「日本の文化」展示リニューアルの一環として、今年三月「多みんぞくニホン」セクションが新設された。本館展示場の最後をしめくくる一角に在日外国人を取りあげた意義は大きい。じつは、この展示を先どりするかたちで、すでに一〇年前の二〇〇四年に同名の特別展を民博で開催している。外国人がうなぎのぼりに増加していた当時をふりかえりながら、今日の多みんぞくニホンを構成する人びとと、かれらを取りまく状況について考えてみたい。

中国人が来日する際に持参したかばん。
1920年代に使用された。
地域：兵庫県神戸市　標本番号 H0275654

特別展「多みんぞくニホン」から一〇年

庄司博史（しょうじひろし）
民博 民族社会研究部

二〇〇〇年代初頭、特別展「多みんぞくニホン――在日外国人のくらし」の構想を練っていたころ、日本では外国人が急増しはじめていた。一九九〇年の約一〇七万人から一二年のあいだに八〇万人も増加した外国人との接触があらゆる場所ではじまった。多くの人びとはかれらを戸惑いつつも好意をもってうけとめたが、文化摩擦や受け入れ体制の不備からさまざまな問題も生じていた。展示では外国人の生活を近距離から取りあげるとともに、ごみや騒音をめぐる摩擦や情報不足のため孤立・困窮するかれらへの支援の手にも焦点をあてた。

展示の目的は外国人の存在を身近に感じ、近い将来に予想されるかれらとの共存の道をさぐることにあった。その背景には、外国人の増加と日本社会への受容が〝順調に〟すすむであろうという推測があった。三か月足らずで特別展は終了したが、来館者の肯定的な評価をバネに常設展示への構想を機会のあるごとに提案してきた。

ミックスの子どもたち。まんなかの子のお父さんはアラブ系トルコ人、お母さんは日系ブラジル人

定住化がすすむ移民

今回実現した展示の基本理念は二〇〇四年の特別展とかわるものではない。ただし外国人をとりまく状況は変化しつつある。かつて、いろいろな意味で新鮮な関心の対象であったニューカマーは多くが日本でうまれた二世をかかえる世代となり、定住化がすすんでいる。外国人という名称にならんで移民ということばも耳にするようになった。コリアンなど四、五世代を経たオールドカマーも、ニューカマーへの脚光とともに改めて移民としての存在を模索しはじめたようだ。

一方で、外国人の増加は続き、かれらの社会参加も進展するであろうという当初の予想は、近年の経済不況や国際情勢のなかで修正せざるを得なくなった。

試練の時代

在日外国人をめぐる状況でもっとも大きな変化は二〇〇八年のリーマンショックにはじまる経済不況である。二〇〇八年に二二三万人のピークに達した在日外国人数は職を失った人びとの離日により減少しはじめ、二〇一三年には二〇〇万人にまで落ち込んだ。一時三二万もいたブラジル人は三分の一が帰国し、日本に残った人びとの生活レベルにも大きな影響がみられる。長期ローンでやっと手に入れた持家を手放したり、授業料を払えぬ家庭が続出し閉鎖においこまれたブラジル人学校の話は枚挙にいとまがない。

一方で「日本には移民政策がない」といわれてきた状況が変わりはじめている。少子化と将来の労働力不足の下支えに移民労働者の導入が検討され始めている。高度人材と短期の低賃金労働者とをポイント制度で選別し入国や滞在の条件を決定するシステムのなかで、働き手としては対象外の呼び寄せ家族や難民は社会のお荷物として扱われる恐れがある。

日本人の境界をめぐって

しかしもっと深刻な兆しもある。コリアンを中心とする外国人への憎悪的言動だ。ネットの世界でまかり通っているおぞましいことばが、真昼の街頭でも目や耳にとびこんでくる。不況や複雑な国際情勢への不満のはけ口では済ませない不寛容と排外主義が感じられる。「違うことはいいことだ」といっていた〝多文化共生〟は、政治とともに姿をあらわにしはじめた単一民族志向の勢いになすすべはないようだ。

とはいえ日本は、民族の境界を固め、閉じこもろうとする意識を突きくずせる方向にもすすんでいる。今日ほぼ長野県民人口に相当する外国人とともに、かれらと日本人、あるいはかれら同士のあいだでのミックスの子どもたちとそれを見て育つ子どもたちが増えている。多数派への同化とそれに抗する大人たちの動きの狭間（はざま）で、今や新生児の三パーセントをしめるミックスの子どもたちは大人が拘泥してきた国家や民族、言語の境をその存在そのもので超え、革新的なグレーゾーンの領域を広げつつある。境界固守の妄想を覚醒させるには、ことばよりはるかに効果がありそうだ。

朝鮮学校の今
——コリアンコミュニティとともに

藤井（ふじい）幸之助（こうのすけ）
関西学院大学非常勤講師

文化の継承を

朝鮮学校。多くの読者には未知の存在、あるいはマイナスのイメージでとらえられているかもしれない。朝鮮のことばや文化・歴史を知らない子どもたちに教えるためにつくられ、歴史は戦前から数えると七〇年を超える。現在、福岡から北海道まで初級・中級・高級学校・大学校が六六校ある。少子化もあいまって、ピーク時の一九七〇年代に比べると四割ほどにまで減少している。日本の学校教育法では第一条に規定された学校ではなく、各種学校とされている。しかし、中身を見てみると、日本の教育と遜色のない内容を朝鮮語でおこなう民族学校として、数少ない言語継承の場でもある。

朝鮮学校に子どもを通わせる二世や三世の親たちの多くは、自身も朝鮮学校の出身だ。朝鮮人であることに誇りをもてるよう、自分たちが経験してきたことを子どもたちにさせてやりたいという。なかには日本学校に通い、民族的なことを学べなかった後悔から、子どもには朝鮮学校で朝鮮語をしっかり学ばせたいという親もいる。子どもたちの多くは三世や四世で、朝鮮籍・韓国籍のほかに、父母のどちらかが日本人という子どももいる。朝鮮学校を卒業し、日本の大学や社会で活躍している人は少なくない。

上：文化祭の一場面（2012年6月、北大阪朝鮮初中級学校）
下：休み時間の子どもたち（2013年6月、中大阪朝鮮初級学校）

子どもたちは両親・祖父母はもちろん、学校の教職員や地域の同胞コミュニティから非常に大切にされている。上の子は下の子たちの面倒をよく見る。運動会など一家総出で応援に来て、お昼はみんな一緒に弁当をつつく。

少人数の強み

ただ、いいことばかりではない。日朝関係がかんばしくないなか、世間の無知や偏見から、朝鮮学校に対する風当たりは並大抵のものではない。高校授業料無償化の不適用や地方自治体からの補助金不交付など、あからさまな差別については、国連人種差別撤廃委員会から日本政府に対し、是正勧告が出されている。

現在、学校数や児童生徒数は減少気味であるが、人数が少ないことが幸いすることもある。芸術活動にも力を入れていて、サッカークラブの男の子たちも発表会が近づくと伝統打楽器のチャンゴやプクや合唱だって練習する。本番では定番の民族舞踊や伝統楽器の演奏のほかに、K－POPにダンスまで飛び出し、芸達者が多い。

朝鮮学校で学ぶ子どもたちも日本社会を構成する大切なメンバーだ。かれらとともにどう生きていくのか。今こそ日本社会が変わるチャンスでもある。

苦学して夢をかなえるネパール人

南（みなみ）真木人（まきと）
民博 文化資源研究センター

料理人から留学生へ

日本に在留するネパール人は約三万二千人にのぼるが（二〇一三年）、その約半数はインドないしはネパール料理店で働く料理人とその呼び寄せ家族である。インド料理店であっても働いているのはネパール人という店が少なくないのだ。とはいえ全国いたるところに新規のインド料理店が開店し、マーケットが飽和してきているなか、ネパール人料理人の増加率は以前ほど高くない。今やネパール人の在留資格でもっとも多いのは「留学」なのである。

なかでもここ数年急増しているのが、日本語学校などの専門学校に通う若者である。四年制大学の入学を目指し日本語を学んでいる人もいるが、大多数の人は働きながら日本語を二年間学び、さらに三年、ビジネスITや工学などの専門学校へ通うことを志す。それが可能となるのは、留学生が「資格外活動許可」さえ得れば一週二八時間まで、学校の長期休業期間は一日八時間まで報酬を受ける活動ができるからだ。また、人材確保に苦労する地方の食品製造業や機械製造業などが、その解決策として留学生のパート労働に期待しているからでもある。こうしてネパールの大学を卒業した若者は、一〇〇万円ほどの初年度経費を借金してでも工面し来日するようになった。

整備される留学システム

一方、少子化と中国や韓国からの留学生の減少を危惧する日本の専門学校は、福島原発事故後も増加しているベトナムとネパールからの留学生に熱い視線をおくる。例えばカトマンドゥで催された「日本留学フェア二〇一三」では、二〇の日本語学校がブースを出し、日本人職員が熱心に応対していた。ネパール側も留学を仲介する教育コンサルタント会社が急増している。そこではどこの地方入国管理局が在留資格認定証明書の交付率、すなわち留学の成功率が高いかといった数値までが共有され、留学生の送り出しシステムが整備されつつある。

日本では震災復興と東京オリンピックによる建築ラッシュをひかえ、外国人技能実習制度の改定によって外国人労働者の受け入れ拡大を進めようとしている。専門学校への留学と資格外活動は、外国人に単純労働の門戸を開いた先行する形態としてもっと注目されてよい。苦学して五年後に、日本の会社へ就職するネパール人の若者が増える日も遠くないだろう。

上：教育コンサルタント会社の宣伝バナー（2013年3月、カトマンドゥ）
中：「日本留学フェア2013」の受付。入場は無料（3月、カトマンドゥ）
下：多くの在留ネパール人が集ったNepal Festival 2013（9月、上野公園）

中華学校の子どもたちにみるニホン

陳 天璽（ちんてんじ）　早稲田大学 准教授・民博 特別客員教員

はじまりは港町

中国系コミュニティといえば、神戸、横浜など中華レストランが軒を連ねる中華街を想起する人が多いだろう。これらの港町へ、幕末の開港にとももない多くの西洋人が買弁（仲買人）とよばれる中国人を伴ってやってきた。中華街が洋館の立ち並ぶ元町附近に位置するのは、そんな歴史的由縁がある。近所を散策すると、しばしば日本の近代化に関係する史跡のほか、改革開放以前より在住している老華僑が設立した中華学校、関帝廟などの宗教施設、会館や同郷会などの互助組織を目にすることができる。

しかし、現在の在日中国人の分布を見てみると、じつは東京在住者がもっとも多く、ついで神奈川、大阪、埼玉、愛知、千葉などに集中している。これは一九七九年の改革開放以降より、引き続き来日している中国人留学生をはじめとする新華僑に起因する。一九八〇年代初期まで、在日中国人人口は台湾出身者も含め五万人ほどを推移していた。その後、中国からの留学生、研修生、帰国者などの来日が増え、昨年末の国籍別在留外国人（登録外国人）統計によると、今では六五万人に上る。中国人は在日外国人の三分の一を占め、最大の外国人グループとなった。このほかにも、日本国籍を取得した中国系が一一万人以上、非正規滞在者が二〜三万人、さらには国際結婚家族で中国系の親をもつ子も含めると、在日中国系の人口は八〇万人をゆうに超えるだろう。

今どきの中華学校

人口が増えているだけでなく、多様化も進んでいる。中国系コミュニティの縮図である横浜中華学院からは、その実態が見えてくる。近年、中華学校への入学を希望する親御さんが増えているが、生徒の背景を見ると、祖父も日本生まれという華人四世の子、台湾生まれで親の仕事の関係で来日した子、片親が日本人もう一方の親が中国系の子、欧米人の父と中国人の母をもつ子、なかには中国系の血筋をもたない子もいる。さまざまな背景をもつ子どもたちが同じ教室で学んでいる。授業言語はいうまでもなく中国語であり、子どもたちは獅子舞など中国伝統芸能を身につけている。しかし、好きな遊びはパズドラ、大好物はカレーだ。

これからの社会を担う子どもたち、そして、在日中国系コミュニティがこれだけ多様化している日本社会は内包しているのがわかる。るのをみると、それを内包しているのがわかる。確実に多みんぞくニホンとなっているのがわかる。

上：休み時間、教室で過ごす生徒たちのようす
右上：クリスマス会に龍舞をする横浜中華学院の生徒たち
右下：大阪中華学校の教室

ベトナム寺の建立
——ベトナム人コミュニティの現在

野上（のがみ） 恵美（えみ）　神戸大学大学院国際文化学研究科

叶った夢

初めてわたしが兵庫県神戸市長田区の在日ベトナム人コミュニティを訪れたのは、特別展「多みんぞくニホン」が開催された二〇〇四年のことだった。この一〇年間、わたしは、多くの子どもたちの成長や、新しい命の誕生を見てきた。当時、二歳だった在日ベトナム人二世の女の子は、現在は小学校六年になり、すっかり少女へと成長した。その一方で、大切な家族との永遠の別れに直面し、深い悲しみに包まれた人びとの姿も見てきた。在日ベトナム人が難民として日本という地に根を下ろし始めてから、三九年が経過しようとしている。在日ベトナム人コミュニティは、確実に日本社会に根付きつつあるが、依然として外国人コミュニティゆえの問題に直面している。

前回の特別展から今回の常設展示の実現までの一〇年で、在日ベトナム人コミュニティ内に起こったもっとも大きな出来事は、ベトナム寺が建てられたことだろう。信仰の拠りどころとして、自分たちの寺をもつことは、在日ベトナム人仏教徒にとって悲願であった。二〇一二年五月におこなわれた落成式では、涙ながらに今日という日を迎えられた喜びを語る女性の姿があった。その後、二〇一三年には、兵庫県姫路市にもベトナム寺院二寺が建てられた。日本におけるベトナム寺は、在日ベトナム人仏教徒のための信仰の場としてだけではなく、ベトナム伝統行事をおこなう文化継承の場、日本人ボランティアを講師に招き日本語教室をおこなう相互交流の場として、地域の人びとの生活をより豊かなものにする役割を果たしている。

神戸市長田区に建立された寺の仏像

第二世代がつくる希望

近年では日本におけるベトナム人人口が、結婚や留学によって増加しており、在日ベトナム人コミュニティの規模は拡大し、活発化することが予想される。しかしながら、ことばの問題や差別、そして二世の教育など、以前から指摘されている問題が残されたままである。それだけでなく、一世の高齢化という問題も顕在化しつつある。これらは、日本社会の問題として日本人も考えていかなければならないが、一方で在日ベトナム人二世たちも真剣に取り組んでいる。このような若い在日ベトナム人の姿から、在日ベトナム人コミュニティのさらなる可能性を感じずにはいられない。

上：姫路市D寺での灌仏会（かんぶつえ）〈花祭〉のようす（2013年5月）
下：神戸市カトリック教会での旧正月のつどいのようす（2014年2月）

ブラジル人の足あと

拝野寿美子
神田外語大学非常勤講師

シュラスコサンド移動販売車

帰国するブラジル人

日本に住むブラジル人は二〇一三年末現在およそ一八万人。ピーク時（二〇〇七年末）の三二万人から半減するのは、もはや時間の問題だ。集住地の雇用現場では「ブラジル人不足」が嘆かれ、かつては二〇〇名を超えていたあるブラジル人学校の就学者も今では二ケタになった。改定入管法が施行されブラジル人が急増した一九九〇年から、まもなく二五年を迎える。

今からおよそ三〇年前、インフレ率が二〇〇〇パーセントを超えるほどの経済的混乱がブラジル人の国外流出を促したのだが、二〇〇〇年代半ば以降、ブラジルは経済新興国と称され再び世界中から移民が集まる国となった。海外在住ブラジル人の帰国も相次いでいる。

取り込み、飛び込んでいく

二五年という歳月が残したものは決して少なくない。特に集住地では、ブラジル人と地域の人びとが共生するなかで、相手を自らに取り込もう、自ら相手に飛び込もうという試みがなされてきた。シュラスコサンドもそのひとつ。サンドイッチにアレンジされたシュラスコ（ブラジルの代表的な料理である肉の串刺し）が、日本語のメニューを大きく掲げたトラックで移動販売されている。群馬県大泉町にあるブラジル人向けのスーパーマーケットでは、日本人顧客を獲得するための店員への日本語の授業が始まり、ブラジル人向けのミサがおこなわれるようになった。一方、代表的な集住地である浜松市に本社を置く日本の食品製造販売会社は、ブラジルの軽食であるパステルを日本人になじみのある味付けにして商品化し、店舗を首都圏にまで拡大している。

異文化との出合いは自文化を豊かにするというが、二五年を経てようやくそれを確かめられるようになってきた。商品のように形ある文化はわかりやすい。ブラジル人との共生でわたしたち日本人はどのように変化してきているのか。一方で、その多くが二〇代となっているブラジル人第二世代は、これからどのように生きていくのか。彼らはわたしたちの社会を映し出す鏡でもある。両者の内面にある目には見えないお互いの足あとを辿る作業はまだ緒についたばかりである。

ブラジル人が通う大泉町の教会。日本語とポルトガル語が併記されている

新大久保・イスラーム横丁の今

菅瀬晶子
民博 研究戦略センター

変わりゆくふるさと

「新大久保出身」というと、必ずといってよいほど「ああ、外国人がたくさんいるところですよね」と言われる。そのことばの陰にはたいてい、マスコミが喧伝する「国際犯罪の温床」というイメージが隠れていて、あまりよい気分はしなかった。一九九〇年代にはこの界隈の東南アジア料理店がエスニックブームを牽引し、その後二〇〇二年の日韓共催サッカーワールドカップを契機に、「韓流の街」として名を馳せるようになったのは、周知のとおりである。しかし今、この街でもっとも勢いがあるのはムスリムだ。なにしろ「イスラーム横丁」とよばれる一角まで登場しているのである。

東京有数のムスリムタウンへ

二〇〇六年の早春、JR新大久保駅から実家へ向かう途上で、いきなり「中東の市場の匂い」が濃厚に漂った。シナモンやクミン、カルダモンなど、幾種類ものスパイスが混じりあったその匂いは、パレスチナをおもな調査地とするわたしにとって嗅ぎ慣れたものである。匂いの出所を探ると、路地裏にインド人ムスリムがハラール食材店を開店していた。雑然とした店構えではあったが、客がひきもきらず、誰もが両手いっぱいに食材を買い込んでゆく。彼らの最大のお目当ては、当時まだ日本では貴重だったハラール肉であった。イスラームの作法にのっとって加工されたハラールの冷凍肉を、この店はオーストラリアやブラジルから仕入れ、販売していたのである。

ほどなくしてこの店は表通りに進出し、見る間にライバル店も増え、一帯は東京有数のムスリムの情報交換の場にまでなった。店の仕入れルートも輸入のみではなく日本市場とかかわるようになり、今ではハラール肉を群馬県の専用加工場で生産するまでになっている。外国人ムスリムで占められていた客層も次第に変化し、本場トルコの職人が手掛けるケバブ・スタンドには地元の高校生が列をなし、エスニック料理ファンの多彩な年齢層の日本人が、手に入りにくい食材を求めて全国からやってくる。国籍も人種もさまざまな人びとが、日本語を共通語としてコミュニケーションを取る姿は、なかなか感慨深い。「国際犯罪の温床」から真の国際都市へと、新大久保が変貌を遂げつつある証が、ここにある。

みんぱくで展示されているケバブ店の看板。ケバブ丼まである。
標本番号 H0274584

ハラールフードをあつかうお店の店内

新大久保のイスラーム横丁